孟森氏の訃

孟森氏が本年一月亡くなつたことに就いて、日本の學界は何等の報道に接しなかつた樣だ。九月初め北京に入つた私は、羽田先生から同氏に贈らる可き「滿蒙史論叢」一部を託されてゐた。かねて私淑の同氏を訪れるのに、いゝ土產の出來たことを喜んだ私は、來着早々氏の舊翰を取り出して見ると、意外にも其の居所が、私の假寓淸華同學會とはつい目と鼻の先、騎河樓馬圈胡同四號であることを知つた。滿蒙史論叢の外に羽田先生の滿和辭典や私の滿洲實錄なども重い一包に作り、いそ〳〵と出掛けて見ると、なる程孟それがしといふ名札が見える。孟森とはないが、何れ氏の一名でゞもあらう位に考へて案內を乞ふと、出てきたのは年若くして薄汚い大男である。

「孟先生在家不在家」

男はやゝしばらく、名刺と私とを半々に見較べてゐたが、

「プープートントン、プートントン（これは何を云つてゐるのか私に分らないのである。假りに男の喋つた調子を寫したまでゞある）現在不在了。……現在不在了。」

「不在家麼？　上那兒去了？」

「プープー、プープートントン、プートントン……」

これで門は閉められてしまつた。翌晩席を共にして鯨飲した數名の若い支那學者連は、告ぐるに孟森氏の訃を以てすると共に、私の話を大いに笑つた。とんだ行先きを尋ねたものではある。門際で窺つた孟宅は如何にも貧汚だつた。

今、私は孟氏の學問、經歷などに就いて記述し得る便宜を有たない。然し兎も角氏が近頃の碩學と謂はる可き人であつたことについて異論はあるまい。氏の專攻分野が淸初史學にあつたことは言ふ迄もない。氏は淸初史の專問家として聞えたが、又典故の學に於いても蘊蓄稀に見る學者だつたといはれる。氏の論述は極めて豐富の樣だが、然し私の知る限りに於いては、十數年前に刊行された「淸朝前紀」が、その最初の述作でなかつたかと思はれ、從つて又比較的晩學の人でもあつたのではないかと想像される。「淸朝前紀」に就い

ては彙文堂のオヤヂがこんな話を傳へてゐる。その本が出て間もない或る日、故内藤湖南大先生が彙文堂に入つて來られるなり、

「近頃孟森とかいふ男が、變な本を書いて俺の說の惡る口を言つてゐるさうだ。生意氣な奴だ。どんな本だか一寸見せい。フン、これかい。ウム、ウム。フン、こりや一寸やりをる。こりや買つておいてやらう。」

といふ樣なことで御買上げを賜つたといふ話である。

數年前氏は「明元淸系通紀」一書を世に問うて、淸初史學の集大成を試みんとしたものゝ如くである。當時に於ける氏の壯大な意氣込みは、同書卷頭に自から序して「余が淸初史の研究に從事してより已に二十年、其の間思ひの積むもの漸く大を成した。今著はす明元淸系通紀第一冊はたゞに肇祖のことを述ぶるのみで、已に三百頁に達した。肇祖に關し淸實錄に述ぶるところは半頁に足りない。而もこの多量の述作になつたことを思ふと、今後著はさんと欲するところは果して幾何量に達するか吾乍ら分らない」とあるに見て窺知に難くないものがある。惜しむ可し、遂に續く可き述作なくして止んだらしい。然し乍ら本著述以後と雖も、雜誌類に發表した氏の論述は決して尠少ではない。氏の精進は最後にまで續いた。

嘗つて本誌で「現代支那名家著述目錄」を連載したとき、孟森氏をおとした。思はずしておとしたのではない。思つたのだが編者がなくて止めてしまつたのである。當時支那から留學して羽田先生の助手を勤めてゐた美女徐文綺が「かういふ目錄を作るのなら、先づ第一に擧げなければならない孟先生をおとしてしまつたのは怪しからぬ」と可愛い氣焰を擧げてゐたことどもをも、今は戰塵硝煙の彼方に行方知れずになつてしまつた彼女とともにつくゞ〳〵想ひ出すのである。先日故宮文獻館の若手連に「孟先生の著述目錄はないか」と質ねて見たが、沒有と一言答へたきりである。何れ機があつたら私も作りたいとは思つてゐるが、徐文綺の冥福を祈る意味に於いても、誰か早速作つてくれゝば一層いゝ。（十三・十・十四、北京にて）

今西春秋

附記

右書き送つたところ折り返し編輯者から、この際私が孟氏

の著作目錄を作るのがあたりまへだらうといふ樣なことを言つてきた。思ふに本場の北京に居て利便はいくらでもある筈だといふ樣なことらしいが、然しこれがとんだ見當違ひといふもので、凡そ今の北京に居て私共自體がこの種の仕事に從事しようとしても先づは出來ないことだと云つていゝ。編輯者の申し付けどうしたものかと思案最中、たまゝ北京圖書館勤務の黃仲君なる人と知り合つた。目錄に精しい人らしいので、語るに孟氏著作目錄のことを以てして見ると、早速の快諾を得、兎も角編輯者の申し附けも果し得れば、私の希望も思ひがけなく屆いたわけだ。かういふ意味に於いては矢張り北京は利便だと言へるかも知れないが、然しこれはまづ僥倖事だ。私は、本目錄作製のため繁忙中の數日を快く割いてくれた黃君に深く感謝しなければならぬ。但だ本目錄中、勝手乍ら森鹿三氏並びに私の手を以て若干補入したものゝあることを併せ記して黃君の諒恕を乞ふ次第である。（十三・十一・九　追記）

孟森先生著作目錄（年數はすべて民國紀元）

黃仲編

其一——編著者

法學通論一册（三年商務印書館出版）
財政學一册（五年商務印書館出版）
心史叢刊一集・二集・三集共三册（五六年商務印書館出版）
清朝前紀一册（十九年商務印書館出版）
明元清系通紀十六册（廿四年北京大學出版）
清初三大疑案考實一册（廿四年北京大學出版）
明史
清史 ｝以上二種爲北京大學講義、非賣品

其二——繙譯者

平民政治二册〔英國 Bryce. J. B. 原著〕（元年上海民友社出版）
民法要義五册〔日本梅謙次郎原著〕（二年商務印書館出版）
統計概論一册〔日本横山雅男原著〕（二年商務印書館出版）
日本憲兵制一册（南洋公學譯書院出版、原著者出版年月不詳）

其三——雜誌論文

建文遜國事考（國立北平圖書館館刊五卷六號、廿年十一・十二月）
清史傳目通檢（同上六卷二・三號、廿一年三—六月）
遼碑九種跋尾（國立北京大學國學季刊三卷三號、廿一年九月）
清史稿中建州衞考辯（中央研究院歷史語言研究所集刊三本三分、廿一年十月）
清始祖布庫里雍順之考訂（同上）
建州衞地址變遷考（同上三卷四號、廿一年十二月）
清史稿應否禁錮之商榷（同上）
讀明季奴變考（清華學報八卷一期、廿一年十二月）
文館詞林校記（國立北平圖書館館刊七卷一・六號、廿二年一・二月、十一・十二月）